

あなたにとって異星人が住むかにみえる《少女都市》 — 日本館の展示

コミッショナー 磯崎 新

日本館においては、世界のどこの都市よりも早くに、変質を開始しているメトロポリス・東京の深層部におこりつつある事件をとりあげる。それは“少女都市”。ここでは旧い共同体を支配している道徳性(*morality*)は捨て去られている。そして何ものにもしばられない行動がみられる。その自由があたらしい倫理性(*ethic*)をつくりだしはじめている。

日本の都市の変容。2つのレベルで顕著にみえよう。すなわち建築物の内部(プライベート、住居)と外部(パブリック、都市)を区切る輪郭線がぼやけ、崩れはじめた。その内側に住みこんでいる家族の理想像(核家族—両親十子供)も保持されていない。その像を収容するために編成された都市住居の型(nLDK)も無意味になった。

建築物の輪郭線、そこに収容する理想的家族像、この両者が崩れたことは、近代、脱近代をつうじて組み立ててきた現代の都市が成立根拠を失ったことを意味している。

その兆候は5年前(1995)に都市的出来事として日本は体験している。阪神淡路大震災は、きらびやかに飾られた都市の表層記号は、単に一時的で、一瞬にして消え去るもので、内実は瓦礫となった物体に過ぎないことが露わになった。同年に発生したカルト集団による地下鉄でのサリンガス散布事件では、簡単な手段で、メトロポリスの大動脈を麻痺させうることが示された。

いまでは、この2つの事件から日本の都市は回復したかにみえる。だが、これは深い傷痕を生活者、芸術家、建築家に残している。以来、日本の都市は深層部において大きい変容をはじめている。

日本館のタイトル「少女都市」はこのような都市の変容を具体的なインスタレーションとして提示する。ここでは少女は13才。15才を過ぎると大人になる。10才までは幼児として社会的に保護されている。13才の少女は大人でも子供でもない中間点にある。社会的な役割としての男女の区別にも遭遇していない。男もあり女もある。つまり、世代的に明示される社会制度としてのジェンダーからみても、彼女たちは中間点にいる。一瞬のことである。だが輝いている。

2000年の日本の都市は、彼女たちの一瞬の輝きによって支えられているといつても過言ではあるまい。たとえば、東京の中心部は彼女たちの皮膚感覚の延長として創りだされたグッズ、ファッション、ライフスタイルによっておおわれつくしている。旧来の通念からすれば異常にみえるだろうが、そこみられる脱領域的、脱制度的な趣好が、これまで近代的とみなされた目標にむかって形成してきた都市の形態や制度を一挙にふきとばそうとさえしているのだ。

爆発的な事件は、これまでの都市を組み立ててきた境界線上に発生している。建築物の輪郭線を消し、内部と外部の区切りさえなくし、闇の感覚だけが残される。[妹島和世+西沢立衛]。衣服と住居の区別を排して、ヘビィ・デューティの衣服がつくられる。フォームレス(*formless*)

なホームレス(*homeless*)のデザインとしての「マザー」のシリーズ。[津村耕佑]。現実と仮想の区切りもなく、ひたすらその境界が無限に増殖するフィンガー・プリントによって埋めつくされる。[でき やよい]。そしてあなたがたは異邦人のような眼をした大群の少女たちを、彼女たちにとっての異邦人の視線によって撮しとられた写真に出会うことになる。[ヘレン・ヴァン・ミーン]。

